

## 国語教育

小林 一貴

2018年は、近年の研究動向の一つでもあるが、授業場面の分析・考察に基づく学習過程の研究が多く見られた。次期学習指導要領を視野に入れ、教科横断的な視点から汎用的能力の育成が議論される中、研究面、実践面において学習者の側から教科の内容が問い直されつつある。

全国大学国語教育学会の『国語科教育』第83集(2018.3)の《研究論文》を見てみる。北川雅浩「小学校段階における討論学習の必要性の再検討」は、〈異論受信型〉(「他者からの異論を聞くのみ」)と〈討論型〉(「他者と討論などをする」)の学習における学習者のコミュニケーション意識の違いを調査し、考察している。西田太郎「メタ認知的活動を意図した文学の読みの学習」は、小学校の授業における読みの交流活動の分析を通して、学習者の解釈形成過程におけるメタ認知の様相を明らかにしている。《実践論文》として、高松美紀「世界俳句の検討による伝統的な言語文化の相対化」は、国際バカロレアの「知の理論」の視点をふまえ、伝統的な言語文化としての俳句を学習者が相対化し、再構築していく授業について論じている。第84集(2018.9)の《研究論文》では、古賀洋一「説明的文章の読みの指導における階層的な論証の理解」がある。ここでは読みの過程において学習者がどのように「理由付け」への批判的関与を行っているかが考察されている。また、北川雅浩「自律的な討論の実現に向けた指導に関する一考察」は、討論の学習に

おける協同性の高まりに関わるはたらきかけを類型化し、学習の実態を検討している。《実践論文》として、高井太郎「ICTを活用した作文ワークショップの実践」、勝田光・澤田英輔「リーディング・ワークショップによる優れた読み手の育成」がある。これらの論考では、読むためのテキスト、書くためのテーマやジャンルを学習者が選択し、表現過程における問題や課題を中心に学習活動を組織する授業のあり方が論じられている。

日本国語教育学会の『月刊国語教育研究』では、松本修・西田太郎「読みの交流に深さをもたらしメタ認知の促進」No.553、齊藤真子「中学校における短歌創作学習の可能性」No.555、澤田英輔「プロセスを教え、書く場をデザインする」No.560がある。これらは、学習者の表現活動と学習指導の形態とを包括的に論じている。また、小特集として「演劇と国語教育」No.552が組まれている。

『国語科教育』第83集の書評に取り上げられた著作には、萩中奈穂美『「説明的表現能力」育成のための学習指導論』(溪水社)、第84集には坂本喜代子『対話的コミュニケーションが生まれる国語』(溪水社)、奥泉香『国語科教育に求められるヴィジュアル・リテラシーの探求』(ひつじ書房)がある。

国語の学習過程の研究方法は専門的で細分化している。また、学習指導の方法も多様化しつつある。ICTの活用や新たなメディアの導入も進みつつある。関連領域の拡大に伴って、学習の実質をふまえた授業を組織するためにも、教材のテキストと表現行為の研究法のさらなる検討が課題となる。(岐阜大学)